別紙　著作物対比表

場面	原告著作物	場面	被告著作物
1	【甲1・02分02秒～3分20秒】 「（C）捜索は警察と自衛隊がやったと思っている人達がほとんどだ。ウチらのところは、俺たちだけだ。あとは、本当に誰の手も借りてない。自分達だけ。」「津波被害に遭って、家族を失い、家を失った人も被災者。南相馬市に住んでるだけで、被災者。津波っていう言葉は出て来ない。津波のこと言う人は誰もいない。放射能のことしか言わない。」「ずーっと、置いてきぼりだ、ここは。」 （2012年3月15日収録インタビュー） 写真省略 写真省略 ＜写真・独白するCさん（上）＆津波被災地に遺る自宅（下）＞	1	【甲2・93頁7行～12行】 Cの目の前には、毎日地獄が広がっているというのに、福島の津波被害が取り上げられることは極端に少なかった。一ヶ月以上もの間捜索に来ない自衛隊。原発事故ばかりが注目され、世間に認知されない福島の津波被害。 置いてきぼりだ、ここは－ Cの中には、この頃からそんな思いが消えなくなった。
2	【甲1・20分40秒～22分00秒】 「（A）当時、奥さんは妊娠中で？」 「（C）うん。だからっていうのもあって、当然やっぱり不安だよね。だから、避難して貰った。でも避難したらガソリンがなくて帰って来れないとか。だから、火葬に立ち会えなかった嫁さんの気持ちっていうのは、すんごく辛かったと思う。」	2	【甲2・97頁16行～98頁7行】 「百か日法要の席で骨壷に向かって手を合わせたまま、Cはふと隣で手を合わせるMのことを想った。お腹を痛めて産んだ娘を亡くし、その骨を拾ってやることさえできなかった妻。（中略）法要の経を聞きながら、CはMの胸の内を想った。 「それまではNを見つけなきゃってことばっかりでさ。そん時になって

2	（文字スーパー／原発事故の避難で 娘の火葬に立ち会えず） 写真省略 「原発がなければさ。毎日、顔を見て、えりかの顔を触ってあげて、頬ずりだって出来たと思う。そういうことが全くできないまま、火葬になって、骨も拾ってやることが出来なかった。その嫁さんの気持ちっていうのは、辛かっただろうなっていうのはあるねえ。」 「でも、そんなことに俺、気づいたのも、１００ヶ日あたりが過ぎてからかな。そのあたりに気づいたんだ。その嫁さんの気持ちが、辛かっただろうなっていう部分。駄目な旦那だから俺は。で、気づいたらね、そっからだね、東京電力さんに、怒りが出てきたのは。」 写真省略 （2012 年 3 月収録インタビュー）	2	やっと、嫁さんの気持ちに気付いたんだよ。俺は、だめな亭主だからさ。なんで嫁さんがこんなしんどい思いしなきゃいけないのかって。N の捜索だって、警察も自衛隊も手伝ってくれないし。それはなんでって想ったら、やっぱり原発事故が原因でしょ。そこからだよ。東京電力に、怒りを感じるようになったのは」

3	【甲 1・05 分 59 秒～06 分 50 秒】 「（C）いつまで、出来るか、わかんないけどね。やれるうちは、やりましょうと。」 「捜索っていうのを、自分の中で、まだ諦めては全くいないので。 あくまでも、捜す人がゼロだったら、もう見つかる可能性はゼロ。 捜す人がいれば、ゼロではないっていうふうに、自分で思うから。」 （2012 年 10 月～2013 年 2 月 収録したCさんインタビュー） 写真省略 写真省略 ＜写真・2012 年捜索風景（上）＆捜索中のCさん（下）＞	3	【甲 2・146 頁 15 行～18 行】 南相馬市だけでも、海岸線は南北に 20 キロ以上続いている。広大な沿岸部の中でNを見つけ出すことが、気の遠くなるような作業であることは分かっていた。だがCには、捜索をやめる気などなかった。「捜索をやめたら、そこで可能性はゼロ。やめない限り、見つかる可能性はゼロじゃない」。自分を鼓舞するように、周囲にもそう話していた。

4	【甲１・22分58秒～23分40秒】 「（Ｃ）で、途中でね、Ｎは、『俺を生かすために出て来ないのかな？』って思った時があったの。俺多分、あの時にＮ見つかってたら、俺多分死んでると思う。」 「早い段階で見つかってたら、その嫁さんのこととか、いま、そこにお腹に赤ちゃんがいるとか、そういうのは全く関係なくて、多分、あそこで、早い段階でＮが見つかって抱きしめてたら、俺多分、自分で死んでると思う。ここで。」 「だから、Ｎに助けられてるんだなあと思ってた時があったの。Ｎはわざと出てこないのかなって思って。見つかんないように、してるのかなって思ってたの。」 （2013年６月 収録したＣさんインタビュー） 写真省略 写真省略 ＜写真・海岸を歩くＣさん（上）＆行方不明の長男の遺影（下）＞	4	【甲２・147頁４行～10行】 この１年間、Ｎを捜しながら、Ｃには思うことがあった。 「Ｎは、俺を生かすために出てこないのかなって思ったのね」 Ｃは、Ｎが見つかれば、自分も命を絶とうと考えていた。ＯとＮに会いたい、２人の元へ行きたい、そんな想いだった。自分には、妻のＭと生まれたばかりのＰがいる。頭ではそう理解しながらも、Ｎたちに会いたいという気持ちは抑えようがなかった。Ｎはそんな自分の気持ちを知って、敢えて出てこないのではないか。Ｃは一人海岸を歩きながら、そんなことを考えていた。
5	【甲１・57分53秒～58分24】 「（Ｃ）間違ってる、ってすごく思ったので。こんなのは、ホントにおかしすぎるっては思ったのでね。ここを、Ｄさんがずっと一人でやってた（捜索してた）のかと思うと。…やはりね、あんなに困ってる人が	5	【甲２・187頁15行～188頁１行】 「『子供捜したい』って、親として当然の気持ちでしょ。それを堂々と『捜して欲しい』って言えない世の中の方がおかしいって思ったの。俺はＯを抱きしめることも、おふくろの火葬に立

5	いるのに、日本は何にもしないんだと思って。」 「そのくせ、テレビとかでは、絆だとか、復興だとかが、よく使われてた訳でしょ？あまりにも、その差がさ、ありすぎて。」 （2015 年 3 月収録したＣさんインタビュー） 写真省略 写真省略 ＜写真・捜索するＤさん（上）＆Ｃさんインタビュー（下）＞	5	ち会うこともできたし、自分の手で捜せただけ幸せだったと思う。でもＤさんは避難させられて、それもできなかった訳だからね。こんなに困ってる人がいるのに、助けられない日本って何なんだと思った。そのくせ絆だとか言うでしょ。ふざけんなと思ったね」
6	【甲 1・32 分 43 秒～33 分 16 秒】 「（Ｃ）もう俺フェイスブックも全部辞めたのね、みんなの普通なのは、それは当たり前なんだけど、その普通のが目に入るのも辛くて。」 「みんなは普通なんだよ。それは当たり前。そんなのもう全然、自分の中では理解してるんだよ。だけどそういうのも見るのも、辛くて。」 「うーん、なんでだか。ちょっと、それが受け入れられなくなってるというか。」 （2014 年 2 月に収録したＣさんインタビュー）	6	【甲 2・192 頁後ろから 1 行目～193 頁 8 行】 …震災の翌年から始めたフェイスブックでは浜団の仲間とも繋がっていたが、前年の末にアカウントを消去し、開くことはなくなっていた。この頃の心境をＣが語る。 「やっぱりフェイスブックってみんなが投稿するわけじゃん、当たり前だけど。でも当然、俺は、みんなとは違う訳でさ。萱浜に来てるみんなも、それぞれのとこに帰れば普通だから、ご飯食べてどうだとか、どこで遊んでるとか、そういう投稿も見えるじゃない？

6	写真省略 写真省略 ＜写真・Ｃさんインタビュー（上）＆雪の萱浜風景（下）＞	6	それが普通だし、そうだよなって頭では分かってはいたけど、みんなの普通のところを見るのがつらくなったのね。だって、俺自身はずっと異常なところにいる訳だから」 手伝いに来てくれる人の気持ちはありがたかった。だが気持ちを寄せる周囲と実際に家族を亡くした自分との間には、やはり埋めようのない距離があった。
7	【甲１・１時間 01 分 22 秒～02 分 10 秒】 「（Ｃ）入学式が、こっちで４月の６日だったのかな。だから、 その前に買って。当然、僕らも『Ｎ７歳だね。』っていう気 持ちは、当然あるけど。でも、そこで、いないっていうのもね、 当然あるからね。そこも、ずっと繰り返してるというかね、うん、 いろいろ考えるでしょ？いろいろ考えるから。」 「で、自分たちだけの入学式ってね。大体アレでしょ？入学式の 時には、みんな、玄関のとこで写真撮るでしょ？…で、Ｎも、 写真をＰが持って、カバンをママが持って写真撮ったけどね。」 （2014 年６月に収録したＣさんインタビュー）	7	【甲２・195 頁７行～17 行】 あの日から４度目の春を迎え、ＣとＭは紺色のランドセルを買った。あの頃３歳だったＮも、生きていればこの春に小学校に入学するはずだった。 ４月７日。Ｎが通うはずだった大甕小学校の入学式が行われた日、Ｃは自宅の前で写真を撮った。 「小学校入学する時は、みんな家の前で写真撮るでしょ、ランドセル背負って。だから嫁さんがランドセル持って、ＰにＮの写真持たせて撮ったの」 写真省略 （書籍で使用している記念写真）

7	写真省略 写真省略 写真省略 ＜写真・祭壇に供えられたランドセル（中）＆記念写真（下）＞	7	
8	【甲 1・41 分 57 秒 ～43 分 15 秒】 「（司会）えー、じゃあ、３列目の男性の方お願いします。」 「（D）えー大熊町、熊川区のＤです。」 （文字スーパー／大熊町の住民 Ｄさん） 「私自身その、土地を売るとか、貸すとか、全く今考えられない状況で、っていうのは、津波で家族が流されて、今も一人見つからない状況で、あの、捜し続けてますし、これからずっと捜していくつもりです。それを、人に手渡すっていうのは、ちょっと 考えられないんで。」 （2014 年 6 月の中間貯蔵施設住民説明会）	8 8	【甲 2・205 頁 3 行～8 行】 環境省の一通りの説明が終わった後、Ｄは質疑応答の場で手を挙げ、前に座る役人を睨むようにして言った。 「私自身、土地を売るとか貸すとか、まったく今考えられない状況で。津波で家族が流されて、今も一人見つからない状況で、あの場所で捜し続けてますし、これからずっと捜していくつもりです。それを人に手渡すというのはちょっと考えられないです」 言葉遣いこそ丁寧だったものの、その声は強い怒りを帯びていた。

8	写真省略 写真省略 ＜写真・手を挙げるＤさん（上）＆発言する険しい表情（下）＞ 「(司会) じゃあ環境省から。」 「(環境省) Ｄ様、どうもありがとうございます。津波であの、ま、ご家族様がえー、ま、犠牲になられたということで、・・・心の問題と申しますか、そういう整理も付かない状況だというお話。本当に、あの、返す言葉もございません。いま、そういうお話初めて、まあ、Ｄ様のお話を初めて、直接聞かさして頂きまして、非常に、どう申していいか分からないというようなところが、正直なところで。」 写真省略 写真省略		【甲 2・205 頁 9 行～12 行】 　環境省の担当者が詫びながら答える。 「本当に返す言葉もございません。申し訳ございませんが、今そういうお話を初めて直接聞かさせて頂きまして、非常に、なんと申していいか分からないというのが正直なところでございます」

8	「（D）ただ、それを作るにあたって、こう、国なり東電なり、あの誠意というものが全く感じられない。」 写真省略 写真省略 「（環境省）そういう誠意がないと言われれば、お詫びするしかないと思っております。」 写真省略 写真省略 ＜写真・発言するＤさん（大熊）＆返答する環境省＞	8	【甲２・205 頁 16 行～206 頁４行】 「もう私の気持ちは売らないと決まってるんです。いくら説明されても何されても売るつもりはないので。あそこに入れなくなることは考えられないです。中間貯蔵施設を造ることはもしかすると本当に仕方ないことかもしれないんですけど、ただそれを造るにあたって、国なり東電なりの誠意がまったく感じられないです」 担当者は、あたふたと言葉に詰まりながら答えた。 「本当に誠意、大事な言葉でございまして、私自身はそういう、心がけておるつもりでございます。そういう誠意がないと言われれば、お詫びするしかないと思っております」
9	【甲１・58 分 24 秒～58 分 50 秒】 「（A）なんか、その、おかしいことに怒れるって、昔からそういうタイプだったんですか？」	9	【甲２・213 頁４行～10 行】 なぜそこまで人のために尽くすのか。Ｃはこう語る。

	「（C）いや、そんな俺、全然もう、正義感のクソもなかったよ、俺。まあ、いまでも、そんなにねえけど。(笑)」 「（A）やっぱり、震災？」 「（C）以降やはり、なんていうか、自分が置かれた状況とか、 そういうので、変わって行ったんだろうしね。」 （2015 年 3 月Ｃさんのインタビュー） 写真省略 写真省略 ＜写真・Ｃさんインタビュー（上）＆ 捜索するＤさん（下）＞		「俺なんて元々はそういう人間じゃなかったよ、全然。正義感のかけらもなかったな。でも震災があってから、親父やおふくろが生きてたらどうだったかなとか、近所の人が生きてたらどうだったかなって思うとね……やっぱり自分は、生きてるから。俺は、自分がＮに生かされたって思ってるんだよ。見つかったら、自分もＮたちんとこ行こうって思ってたから。だから、生かされてる以上は、自分にできることを精一杯やろうって思ってたんだよ」 　命ある者が、誰かのために、できることを精一杯やる。それはいつしか、Ｃの信条のようなものになっていた。
10-①	【甲 1・1 時間 10 分 02 秒～10 分 10 秒】 「（C）さっぱり、朝から、起きた瞬間から、落ち着かねえからさ。」 （2015 年 3 月 23 日の午前・自宅にてＣさんの発言） 写真省略	10-①	【甲 2・217 頁 3 行～ 4 行】 　だが、3 月 23 日は少し様子が違った。この日の朝、Ｃは久しぶりにネクタイを締め、スーツに袖を通した。身支度を整えながらも落ち着かず、そわそわと家の中を歩き回る。

10-①	写真省略 <写真・ため息をつくCさん（上）＆自宅を歩く様子（下）> 【甲1・1時間09分43秒～09分52秒】 （2015年3月23日 自宅で落ち着かずタバコを吸うCさん） 写真省略 写真省略 <写真・タバコ吸うCさん（上）＆タバコのアップ（下）> 【甲1・1時間10分10秒～10分30秒】 「（妻・M）だから、何に落ち着かないの？」 「（C）女の人はすごいよね。やっぱりね。うん。バカくせぇ。」 「（Mさん）朝から2回も泣いてる人に言われたくないけどぉ。（笑）」 （2015年3月23日の朝・妻に窘められる様子）	10-①	【甲2・217頁4行～5行】 気を落ち着けようと何本もタバコを吸うと、 【甲2・217頁5行】 …同様にスーツに着替えたMに窘められた。

10-①	写真省略 <写真・自宅で会話する夫婦の様子>	10-①	
10-②	【甲 1・1 時間 08 分 01 秒～9 分 12 秒】 「（C）今週の月曜日、（学校から手紙を）貰いました。うん。すごく、配慮された、すごくいい手紙で、一緒に受け取りたいって。そういうふうに、くんであげたいって、子供たちも一緒に卒業式を迎えたいっていうふうなことは、書いてある。」 「（A）Oちゃんと。」 「（C）一緒にって。同級生を見るのは、たぶんつらいと思うんすよ。想像してしまうのでね、わかってはいるけど。その、目を背けたい部分ではあるのかな。もしかしたら、同級生が成長していくっていうのは、当然当たり前のことなんだけど。Oは当然、2 年生のままで終わってて。実際、そのね、成長してる子ども達を目の前で見るっていうのは、すごくつらいことだと思うんで。だから、怖いのかなと思う。ただ、それだけなのかなと思うけど。うん。ね。良かった。」 （2015 年 2 月 手紙を手にしたCさんインタビュー） 写真省略	10-②	【甲 2・217 頁 9 行～16 行】 Cの自宅に一通の手紙が届けられたのは、先月のことだった。手紙はOが通っていた大甕小学校の担任からで、そこにはOの同級生と共に、卒業式に出席してほしいと書かれていた。震災当時小学 2 年生だったOは、生きていればこの春に小学校を卒業するはずだった。同級生たちは、Oと一緒に卒業したいと申し出てくれたのだ。 同級生たちの心遣いに感謝しつつも、Cの気持ちは揺れていた。「行きたいって気持ちと、つらさと……両方だね。学校行くのも、教室入るのもつらいからさ。同級生は大きくなってるから、見るとどうしてもOのこと想うしね。だけど卒業証書はOにとっても俺にとっても、嬉しいことだからさ」

10-②	写真省略 写真・担任からの手紙（上）＆手紙を手にしたＣさん（下）＞	10-②	
10-③	【甲１・１時間 11 分 08 秒～11 分 32 秒】 「（担任）ではこれから、Ｏさんへの卒業証書授与式を始めたいと思います。卒業証書授与。平成２６年度、卒業証書を授与される者。６学年、Ｏ！」 「（Ｃ）はい。」　（2015 年 3 月 担任に呼ばれ、返事するＣさん） 写真省略 写真省略 写真省略 ＜写真・担任が名を呼ぶ（中）＆夫の隣に並ぶ妻・Ｍさん（下）＞	10-③	【甲２・218 頁３行～８行】 ＣとＭ、Ｐが教室の中央に立つ。 担任が、名前を呼ぶ。 「卒業証書を授与された者。６年、Ｏ」 「はい」 すでに目に涙を溜めていたＣが返事をして、前へ出る。ＭがＯの遺影を抱いて、隣に並んだ。

10-③	【甲１・１時間 11 分 55 秒～12 分 34 秒】 「（校長）はい、おめでとうございます。」 （卒業証書を渡す） 「（Ｃ）ありがとうございます。（拍手）すいません。」（涙拭く） 「（Ｃ）えー、４年前の３月に、Ｏはね。天国に逝ってしまった訳ですけど。みんながこうやって卒業式を開いてくれて、ありがとうございます。Ｏとお友達でいてくれて、ありがとうございます。今日は、卒業おめでとうございます。（涙）」 「（誰かが鼻をすするような音）」 （児童の方に向き直り、挨拶に立つＣさんの言葉） 写真省略 写真省略 ＜写真・挨拶に立つＣさん（上）＆涙を流して話す表情（下）＞ 【甲１・１時間 13 分 22 秒～13 分 34 秒】 「（Ｐ）ママ、おしっこ。（笑）」 「（Ｃさん）ガマン！」　（記念撮影の時のＰちゃんの発言）	10-③	【甲２・218 頁 10 行～14 行】 　藍色の台紙に縁取られた卒業証書が、Ｃに手渡された。両手でそれを受け取ると、Ｃは同級生たちの方に向き直り、溢れる涙を堪えながら挨拶に立った。 「Ｏは、４年前に天国に行きましたけど、卒業式を開いてくれて、ありがとうございます。Ｏと友達でいてくれて、ありがとうございます。今日は、卒業、おめでとうございます」 　保護者たちからも、すすり泣く声が聞こえた。 【甲２・219 頁３行～８行】 　最後に記念撮影をしようと、皆が教室の片側に並ぶと、 「ママおしっこ！」 　Ｐが言い出した。あどけない一言に、皆が笑った。泣き通しだったＣとＭにも、笑みがこぼれた。

10-③	写真省略 写真省略 写真省略 写真省略 ＜写真・Ｃさんが笑顔になる瞬間（３枚目）＆Ｐちゃん（４枚目）＞ 【甲１・１時間 14 分 32 秒～15 分 10 秒】 「（Ｃ）じいちゃん、ばあちゃんに見せないと。」 （自宅に帰った後、祭壇に卒業証書を置くＣさん） 写真省略	10-③	【甲２・219 頁９行～10 行】 　式を終え、自宅へ帰った後。ＣはＯや両親が眠る祭壇に、卒業証書と花束を供えた。

10-③	写真省略 ＜写真・祭壇に供えた卒業証書（上）＆手前に見える花束（下）＞		
11	【甲１・１時間 07 分 16 秒～07 分 45 秒】 「（M）うーん、『なんで死んじゃったの？』とか。うーん。」 「（A）そういうふうに？」 「（M）（Ｐが）聞いたりはする。うん。海から、大きな波がやって来て、そのまま、ザバーンって、海に連れて行かれちゃったんだよ。」って。それでね、「おじいちゃんも、おばあちゃんも、えりかちゃんも、こうちゃんも、天国に行っちゃったんだよ。」って。」 「（Ｐは）『ふーん。』みたいな感じでは、いるけれど、うん。」 （2015 年 3 月に収録したＭさんインタビュー・Ｐとの会話） 写真省略 写真省略 ＜写真・祭壇とＰちゃん（上）＆Ｍさんインタビュー（下）＞	11	【甲２・222 頁 7 行～10 行】 Ｍは、以前からＰに、ＯとＮのことを話して聞かせていた。遺影の写真を見せ、「これがお姉ちゃんのＯちゃん、これがお兄ちゃんのＮちゃん。大きな波が来て、海に連れてかれちゃったんだよ」と話していた。まだ会話もままならなかったＰは「ふーん」と返すだけだったが、幼稚園に入り、その存在を理解するようになっていた。

12	【甲１・37 分 38 秒～38 分 04 秒】 「（Ａ）特にでも、子供たちが笑ってるって、やっぱり。」 「（Ｃ）そう、それだけでもう、満足なの。ひとりでも、二人でもって思ってたのが、こんなに沢山の笑顔がある。それで、ありがとうってね。 もう泣けてくるじゃないって思って。嬉しくて。悲しくてじゃなくてね。嬉しくて泣けてくるじゃない。」 （２０１４年５月のＣさんインタビュー） 写真省略 写真省略 ＜写真・満開の菜の花畑（上）＆満面の笑顔のＣさん（下）＞	12	【甲２・226 頁 15 行～227 項１行】 　それもすべて、訪れる人々に「笑ってもらうため」だ。Ｃの願い通り、訪れた人たちは楽しそうに笑ってくれている。それを見たＣは、自分も笑顔を浮かべながらこう話す。 「いいよね、やっぱり。子供とかが笑ってるのを見ると、こっちも嬉しくなるじゃない。泣けてくるもんね。悲しくてじゃなくて、嬉しくて泣けてくる。悲しいことしかなかったこの場所でみんなが笑ってくれてるって思うと、それが本当に嬉しい」
13	【甲１・１時間 38 分 27 秒～39 分 16 秒】 「（Ｃ）（階段上がる足音）倒れることはないから。…あとはＯの部屋だけだね。すごいよ。このままだね、もう。必要なのを取って。」 「（Ｃ）そ、震災の年にしか、上がってない。うん、に上がってっきり。あとは上がってないので。…えー、入学と同時に買った。Ｏが選んだ、やつ（机）だ。」 （2016 年１月 31 日 解体前日の自宅２階へ入るＣさんの様子）	13	【甲２・248 頁１行～６行】 　解体工事が始まる前、Ｃは旧家の２階にあるＯの部屋に入った。部屋はあえてあの日のままにしてあったが、残すべきものは解体前に整理しておかなければならない。 　Ｃが部屋に入るのは、震災の年以来だった。Ｏたちの映像や写真を見返すことと同じように、ありありと思い出すことが怖く、この５年間避け続けていた。恐る恐る部屋に入ると、そこにはＯの欠片が溢れていた。宿題をしていた勉強机やベッド、名前の書いたノートや筆箱、学校の授業で描いた絵、

	写真省略 写真省略 写真省略 写真省略 ＜写真・自宅２階にて（2 枚目）＆ 机上の名前入りノート（４枚目）＞ 【甲 1・1 時間 39 分 16 秒～40 分 14 秒】（2016 年 1 月 31 日 ため息をつき、涙ながらに娘の遺品を整理） 写真省略		試験のプリント。どれもあの日のままだ。 【甲 2・248 頁 7 行～8 行】 Ｃは小さなため息をつきながら、娘の名前が書かれたノートやプリントを整理していった。その一つ一つが、ありし日のＯの面影を蘇らせた。

13	写真省略 写真省略 ＜写真・被災した自宅２階でのＣさん(１、２枚目)＆仕分けられた遺品（３枚目）＞	13	
14	【甲１・１時間 34 分 26 秒～35 分 10 秒】 「(Ａ）もし（被災した自宅が）なくなってしまうと、思い出せなくなっちゃうんじゃないか、とか？」 「(Ｃ）そういうのもねえ、怖いんす。正直もう、ＯとＮの声なんか、覚えてないもんね。（涙、ため息）思い出す事が、出来なくなってるし。…そういうのもあるから、どうしても、怖いなあっていうのもあるし。」 （2015 年 6 月 子ども達の声が思い出せないというインタビュー） 写真省略	14	【甲第２号・248 頁９行～１３行】 「記憶とかってさ、音から先に消えてくんだなぁって思うの。生活してる中で、ふっとＯはどんな声だったかなって思うんだけど、気付いたら耳に残ってないんだよ。当初は全然覚えてたはずなのに。Ｎの声も、親父の声も、おふくろの声も。こんな声だったよなって思い出そうとするけど、本当にそんな声だったか、もう分からなくなってて。俺、忘れちゃってんだよなぁ…」
		14	

14	写真省略 <写真・祭壇の遺品（上）＆涙ながらに語るＣさん（下）>		
15	【甲１・１時間 42 分 35 秒～43 分 01 秒】 （2016 年 2 月 被災した自宅が解体される様子） 写真省略 写真省略 写真省略 <写真・新居の前に一人で経ち、解体をみつめるＣさん>	15	【甲２・248 頁 15 行~17 行】 バキバキッ、バリバリッ。 木製の柱や家具が、激しい音を立てて割れ、崩れていく。Ｃは一人新居の前に立ち、黙ってその様子を見つめた。
15	【甲１・１時間 43 分 25 秒～44 分 53 秒】 （2016 年 2 月 解体される自宅＆Ｃさんの表情）	15	【甲第２号・249 頁１行～８行】 バリバリッ、バキバキッ。 Ｃは、見ていることができなかった。苦しさのあまり目を背け、新居の中へ入る。湧き上がってくる様々な感情に潰されそうになり、それでもなぜか視線はまた旧家に向いた。新居の窓

	写真省略 写真省略 写真省略 写真省略 ＜写真・新居の窓から解体を眺めるＣさん（３枚目）、窓から目を背け、涙を拭い姿を消すＣさん（４枚目）＞		から思い出の家が崩れていく様子を見ていた。見ては背け、背けては見る。それを繰り返すうちに、涙が滲み出てきた。
16	【甲１・１時間 33 分 02 秒～35 分 20 秒】 「（Ｃ）何にも、守れなかったなあと思っている、今。みんなも 守れなかったし、最終的に、この家も守れなかったなあって考える。 「（Ａ）いつかそういう日が、やっぱり…。」 「（Ｃ）（涙）わかってはいたけど。ふう。守りたかったなあと思って。もうちょっと。」	16	【甲２・250 頁２行～３行】 …俺はその親父が残してくれた家も、守ってやれなかったんだなぁって……。家も、家族も……結局俺は、なんにも守れなかったなぁって……」

16	…「（C）はあ。なーんにも、できなかったなあ、結局。」 （2015 年 6 月 家族の命も解体される家も守れなかった話） 写真省略 写真省略 写真省略 写真省略 ＜写真・涙するCさん（1枚目）＆津波の泥が跳ねた天井（2枚目）＆父の遺影と父が残してくれた自宅の写真（3、4枚目）＞	16	
17	【甲 1・1 時間 47 分 19 秒～47 分 42 秒】 「（D）あの、やっぱこれ、治療してある。あの、銀歯が詰まってんじゃね？コレ。」 「（D）これは完璧に人。まだ、これは乳歯。奥歯も乳歯なのかな？」 （文字スーパー／瓦礫から歯と骨が見つかり DNA 鑑定へ）	17	【甲 2・270 頁 7 行～11 行】 それは、明らかに人の骨だった。顎の部分だろう、小さな 3 本の歯が見える。根元の骨は茶黒く変色しているが、歯だけは白いままだ。 Dは恐る恐る、手を伸ばした。崩してしまわぬようにそっと手に取り、顔を近付けて見る。

17	（2016 年 12 月 Qちゃんの遺骨発見の場面） 写真省略 写真省略 ＜写真・遺骨を手にＤさん（上）＆治療痕のある歯と骨（下）＞	17	「これ、治療してある！」 歯には、治療痕があった。先端が平たくなった歯に、銀色の金属が埋め込まれている。